哲學研究　第百九十二號　第十七卷第三號

自愛と他愛及び辯證法

西田幾多郎

三

私は從來、一般者の自己限定によつて判斷が成立すると云つた。併し個物と一般とは、固離すべからざる關係に立つものでなければならない。一般者が自己自身を限定するといふことは、逆に個物が個物自身を限定するといふ意味を有つてゐなければならない。一般者が自己自身を限定することによつて判斷が成立するといふには、それが個物を包む意味を有つてゐなければならぬ、否、少くともそれが個物であるといふ如き意味を有つてゐなければならぬ。ヘーゲルの云ふ如く個物が一般者でなければならぬ。かういふ意味に於て、個物が具體的一般者といふことができ、個物が自己自身を限定することによつて判斷が成立するといふことができる。アリ

ストテレスの立場は此の如きものと考へることができるであらう。併し個物が個物自身を限定するとは何を意味するか。個物が個物自身を限定すると云ふには、我々の自己が自己自身を限定する意味がなければならない。個物といふ如きものは、固、我々の自覺的限定によつて考へられるのである、自己のある所そこに「これ」といふものがあるのである、「これ」といふものは向から定められるのではなく、いつも手前から定まるのである。判斷は自覺的限定によつて成立するといふことができる。かういふ意味に於て、我々の自己といふものは、個物として具體的一般者の意義を有するといふことができる。併し我々の自己といふものは單に具體的一般者として考へられるものではない、自己といふものは飛躍的統一として考へられるのである、非連續の連續として考へられるのである、卽ち有の限定としてゞなく無の限定として考へられるのでなければならない。かゝる限定とは何を意味するか。それはノエマ的には、時が瞬間から瞬間に移ると考へられる如く、點から點へ移るといふことでなければならない、かゝるものが動く個物として個性を有つたものと考へられるのである。かゝる限定に於ては、絕對から絕對に移るのである、窓のないモナドから窓のないモナドに移るのである。我々の自己はライプニッツの考へた如く一つのモ

ナドではなくして、モナドからモナドに移るものでなくてはならぬ。そこに自由意志的自己といふ如きものが考へられるのである。眞に一度的なるものといふのはかゝる自己のノエマ限定として考へられるのである、然らざれば出來事といふ如きものは考へられない。併しかゝる意味に於て主語的方向に一度的なるものが考へられるには、それは如何なる意味に於て一般者の自己限定の意味を有つと云ひ得るであらうか。我々の知識は事實が事實自身を限定するといふことから始まるとすれば、そこには何等かの意味に於て一般者の自己限定の意味がなければならない。それは單に個物を限定すると考へられる具體的一般者といふ如きものではない。具體的一般者と考へられる個物を限定するといふ意味に於て、それは一般者の一般者といふ如き意味を有つたものでなければならない。無の限定として一般者の一般者と考へられるものが動く個物を限定し、逆に動く個物がといふことが一般者の一般者として一般者を限定する意義を有つて居るといふことができる。個物が動くといふことは、一般者の一般者の限定として所謂一般者を限定する意味を有つてゐなければならない。そこに非合理的なるものが合理的として自己自身を限定するといふ眞の辯證法的意義があるのである、質料がイデヤを生むといふことも考へ

得るのである。從來は非合理的なるものを考へるに、唯、合理的なるものゝ立場から考へて居るのである、一般的なるものの自己限定の立場から考へたのである、オンに對するメー・オンを非合理的と考へたのである。併しかゝるものは合理化せられるべきものであつて、眞に非合理的なるものではない。眞に非合理的なるものは合理的なるものを限定するものでなければならぬ。而して非合理的なるものが合理的なるものを生むといふことは、個物が動くといふことでなければならない。一度的なる事實が最勝義に於て個物といふべきであり、事實が事實自身を限定する所から、知識が始まると考へられる所以である。かゝる立場からは所謂具體的一般者の限定と考へられるものは、唯、自己自身を限定する個物と、限定せられる一般者とが合一する場合を意味するに過ぎない。我々の自覺はいつも一般者の一般者の限定として一般者を限定する意味を有つたものである、判斷が自覺的限定によつて成立すると考へられるのは之によるのである。私は無の限定として自覺的限定を飛躍的統一とか非連續の連續と云つたが、連續と非連續とは、固、不可分離的のものでなければならない。限定するものなきものの限定として連續的なるものが考へられるのである。連續的直線といふ如きものであつても、單なる個物といふと異なつて、既に一

般者の一般者の限定の意味がなければならぬ。連續的に動くもの、卽ち動く個物といふ如きものは、上にも云つた如く唯、非連續の連續としてのみ考へられるのである。かゝる個物が我々の考へられた自己といふべきものであり、それは時間的に自己自身を限定するのである。過去から未來へ流れる連續的時といふものは、かゝる意味に於て考へられるものでなければならぬ、所謂時は無のノエマ的限定によつて考へられるのである。有が無によつて限定せられ、無に於てあると考へられる如く、連續は非連續によつて限定せられ、非連續に於てあると考へることができる。それで個物が連續的に自己自身を限定するかぎり、卽ち時間的に自己自身を限定するかぎり、事實が事實自身を限定するとして知識が成立するのである。

一般者が自己自身を限定するといふことは、逆に個物的なるものが自己自身を限定するといふことでなければならぬ。自己自身を限定する個物的なるものと考へられるものは、一般者の一般者として一般的なるものを限定する意味を有つてゐなければならない。それで飛躍的統一のノエマ的限定として動く個物と考へられるものは、自己自身を一般的に限定する意味を有つてゐなければならない、自己自身を表現する意味を有つてゐなければならない。我々の事實的知識と考へるものは、自

己が自己自身を表現することから始まる、コギトが事實的知識の基礎となるのである。我々の意識が單に表現的と考へられる時、我々の自己は未だ個物として自己自身を限定する意味を有たない、意識は單に志向的と考へられる。從つて表現の世界に於てあるものは自己自身を個物として限定する意味を有たない、有るものは唯、一般的なるものとして自己自身を限定する意味を有するのみである。かゝる世界が單なる意味の世界と考へられる。併し一般者は何處までも個物を限定する意義を有し、個物は何處までも一般者を限定する意味を有つてゐなければならない、卽ち自覺の意義を有つて居なければならない。自己自身を個物として限定するに至らない表現の世界は、一般的自己として自己自身を限定するのである。それが我々のノエマ的自覺として、我々に思惟的自己と考へられるのである、表現的自己の自覺として思惟的自己といふものを考へられるのである。飛躍的統一の限定として動く個物が考へられると云つたが、是では尙單なる連續といふ如きものが考へられるまでである。時で云へば、一般的なる現在が自己自身を限定する、卽ち限定せられた現在の自己限定といふことができる。併しかゝる連續は固、非連續の自己限定として考へられるものでなければならない、連續的時は刻々に消え刻々に生れる瞬間的限定

として考へられるのである。飛躍的統一が眞に非連續の連續として自己自身を限定する時、動く個物として個人的自己といふものが考へられる、之によつて事實的知識といふものが限定せられる、卽ち個人的自己は事實として自己自身を表現するのである。かゝる自己の自己限定は身體的として感官的意義を有つたものでなければならない。感官といふものはいつも個人的でなければならない、否、瞬間的でなければならない。感官といふものが非合理的なるものの合理化といふ意義を有つたものでなければならない、そこに個物的にして一般的なるものを限定する意味がなければならない。併し個人的自己といふものは如何にして限定せられるものであるか。自己自身を愛するといふことなくして、個人的自己といふべきものはない、而して愛の限定といふのは、上に云つた如く自己自身を否定することによつて肯定する、死することによつて生きるといふことでなければならない。個物が個物自身を限定することによつて一般者を限定するとか、一般者の一般者の自己限定とかいふことの根柢は此に求められねばならぬ。

我々の自己と考へられるものは自己自身を愛するものでなければならない。愛

の自己限定として自己といふものがあると考へられるのである。そして眞の愛といふのは自己自身を否定することによつて自己を肯定することである、自己に死することによつて他に生きることである。自愛と他愛とは固別のものではなくして、ノエマ的限定とノエシス的限定の關係を有つて居るのである。ノエシス的限定なくしてノエマ的限定なき如く、他愛なくして眞の自愛といふものはない。併しノエマ的限定の意義を有たないノエシス的限定といふものがない樣に、自愛といふものなくして他愛といふものもない。利己主義的倫理學者の說く樣に、愛が自己自身を限定する場合、いつも自愛の形に於て自己自身を限定するのである。單なる他愛といふ如きものはない、それは單なるノエシス的限定といふに異ならない。併しその故に他愛はその根柢に於て自愛であるといふべきではない。從來、倫理學者の考へた自愛といふのは欲求の滿足を意味するに過ぎない。かゝる意味に於て自己を愛するといふことは、愛すべき自己を失ふといふことに外ならない。眞の自愛は他愛を含み、眞の他愛は自愛の意味を有つたものでなければならない。自愛は他愛を限定し、他愛は自愛を限定するのである。その間恰も個物が一般を限定し、一般が個物を限定する意味がなければならぬ。社會なくして個人といふものはない、我々は社

會に於て生れ、社會によつて限定せられるのである。併し個人なくして社會といふものはない、個物が個物自身を限定することによつて一般的なるものが限定せられると考へられる如く、社會は個人によつて限定せられ、個人によつて進展するのである、タルドの如く極微がアルファでありオメガであると云ふことができる。社會的ならざる個人がないと共に、社會は個人に於てその存在の基礎を有つて居るのである。自覺といふのは自己が自己に於て自己を見るといふことを意味すると考へるならば、かゝる意味に於て自覺の場所と考へられるものは社會といふ如き意味を有つたものでなければならない。人格的自己といふのは固、カントの所謂目的の王國といふ如き意味に於て、組織せられたものでなければならない、我々の心の内は一つの人格的社會である。我々の自覺的過程の一歩一歩が絶對の自由でなければならない、非連續の連續が眞の人格的統一と考へられるものである。かゝる統一は、飛躍的統一として、何處までも個物的なるものが一般的なるものを限定する意味を有つてゐなければならない、非合理的なるものが合理的なるものを限定する意味を有つてゐなければならない。かゝる非合理的限定が身體的限定と考へられるものであり、昇華せられた身體が個性を有つた人格と考へられるものである。身體なくして

個性といふものなく、個性なくして我といふべきものはない。單に他愛的自己といふものもなければ、單に義務の爲に義務を盡すといふ理性的自己といふものもない。他愛とか義務とかいふことは、主語的意義を有する自愛的自己の述語的限定の意義に過ぎない。單なる理性や單なる他愛は、何等の行爲の動機も與へない。良心と考へられるものは、最も深い意味に於て非合理的なるものの合理化といふ意味を有つたものでなければならない。我々の眞の自己とは瞬間的限定の底から自己自身を限定するものでなければならない、我々は眞の瞬間的限定に於て永遠なるものに接するのである。我々は日常時々刻々に瞬間に接して居ると考へて居る、併しその實、我々はいつも唯、過去に接して居るのである、瞬間に接して居るのではない、單に因果に押し流されて居るのみである。唯、我々が眞劍に一身を賭する時のみ、我々は眞の瞬間に觸れるのである。瞬間的限定によつてそれに觸れると考へられる眞の永遠は、單に生ぜず滅せざる所謂永遠不變といふ如きものではなくして、絶對無の自己限定として到る所に死し、到る所に生れるものでなければならない。かゝる意味に於て、それは絶對に非合理的と考へられるものでなければならない。我々が瞬間的限定の底に於てかゝる永遠に觸れると考へられる所、そこに我々の眞の自己があり、そ

こに我々は眞の身體を有つのである。パウロの所謂靈の體と稱すべきものは、かゝる意味に於て我々の歷史的身體といふべきものでなければならぬ、所謂肉體と考へられるものはかゝる身體の影像に過ぎない。我々は肉體的自己を脫却して永遠の無に接すると考へられる時、そこに我々は個人的自己を失ふのではなく、歷史人として却つて眞の個人的自己を有つのである。かゝる意味に於ける個人に於ては、自愛は卽他愛であり、愛の自己限定が直に當爲でなければならぬ。絕對に非合理的なるが故に、合理的なるのである。我々は根本的に惡なるが故に良心を有し、個人的なる故に社會的限定の意味を有つてゐなければならない。瞬間が瞬間自身を限定すると考へられる時、そこに一つの世界が限定せられる意味がなければならない。時が限定せられることによつて一つの世界が限定せられるのである。

自己自身を否定することによつて自己を見出す卽ち死することによつて生きるといふ愛の限定には、當爲が含まれてゐなければならない、嚴肅なる義務が含まれてゐなければならない。自己自身に死するといふことは、自己の欲求を否定することを意味するのである。併し欲求の方向に死することは、眞の自己に生きることでなければならぬ。動く個物となるには個物は死なゝければならない、個物も死するこ

とによつて生きるのである。自己が自己の欲求を否定して死に入ると考へられる時、それが歴史的自己として一般的なるものを限定する意義を有たなければならない、そこに當爲的自己の意味が含まれて居なければならない。そこに個物が一般を限定し一般が個物を限定する根本的意義があるのである。時の一つの瞬間から他の瞬間に移るにも、そこに當爲の意義が含まれて居るのである、それは外的必然の推移ではなくして內的必然のそれでなければならない。かゝる場合、我々は個人的自己を失つて一般的自己となると考へられる。併し我々は個物として死することによつて、動く個物となることを忘れてはならない、個性を有つた自由の自己となることを忘れてはならない。かゝる自己は往々、純なる理性として叡智的自己と考へられる。併し單なる理性は自由でもなければ、自己でもない。却つてそれは絕對に非合理的といふべきものでなければならぬ、絕對に非合理的なるものの合理化として、それが眞に個人的自己と考へられ、自由の自己と考へられるのである。自己には何處までも身體的限定の意味がなければならない、感官的といふ意味がなければならない。自由意志といふのは何等の拘束なき無內容なる抽象的意志と考へられる。併し自由意志とは自由なる個人の自己限定でなければならない。何人の意志でも

ない單に抽象的なる自由意志といふもののある筈はなく、又單に無內容なる任意的意志といふ如きものは單なる偶然と云ふべきものであつて、意志といふべきものでない。自由意志の基體たる自由人とは如何なるものであるか。我々は之をノエマ的方向に感官とか衝動とかいふものの底に考へることができる、かゝる場合それは生理的身體といふ如きものが考へられる外ない。そこには因果的必然といふものがあつて、自由といふものはない。更に何等の限定なき全然非合理的なるものを考へれば、それは單なる偶然と考へられる外ない。之に反し、之をノエシス的方向に自己自身の底に求める時、それは理性といふ如きものと考へられる外はない。併し理性自身の決定に自由といふものもなければ、我々の自己が單に理性となつた時、自己といふものはない。唯、我々は歷史的實在として眞に自由人といふことができるのである。瞬間が瞬間自身を限定する底に自由人といふものがあるのである。自由人とは歷史的身體を有つた人でなければならない、具體的意義に於ての感官といふものは固、身體的意義を有つたものでなければならぬ、非合理的なるものの合理化の意義を有つたものでなければならない(此故に感官によつて知識の客觀性が與へられると考へられるのである)。瞬間から瞬間に移り行くことによつて時の連續とい

ふものが考へられるには、瞬間的限定の底に無から無に移り行くものがなければならぬ、否定から否定に移り行くものがなければならぬ、個人の底に個人を破壞するものがなければならぬ。それが惡意志といふものであり、根本惡といふべきものである、而もそこに我々の歷史的實在性があるのである。我々の感官とか身體とかいふものは、かゝる意味を有つたものでなければならない。具體的感覺はそれ自らが誤であり、迷でなければならぬ、單なる感覺といふ如きは思惟の所作に過ぎない。併し瞬間的限定の底に自己自身を否定するものは、愛の自己限定として死することによつて生きるものでなければならない。常に惡を欲する惡魔は常に善を造る意味を有つて居るのである。死が生の意義を有つ時、愛の自己限定は當爲の意味を有たなければならない。個物が自己自身を否定して他の個物に移ると考へられる時、自己自身を一般化せなければならぬ。それが一般的自己と考へられるものである、當爲によつて個物が個物へ移るのである。一々が絕對の無に接すると考へられる瞬間と瞬間とを繫ぐものは當爲でなければならない。個物が個物自身を限定する個物的限定の底に深くなればなる程、自己自身を破つて一般的となる傾向を有つのである。自己自身の罪の深さを知るもののみ、眞に良心を有するものである、當爲は人格

的愛の自己限定の聲でなければならぬ。我々の自己の底には何處までも自己を否定して否定から否定に移る、卽ち無から無に移るものがある。それが身體的限定として自由意志と考へられるものである。併しかゝる否定的限定は死することによつて生きる愛の否定的限定として、一面に當爲的限定の意義を有し、個物が一般的なるものによつて限定せられる意味を有つて居る。而して一般者によつて限定せられると考へられるかぎり(當爲によつて結合せられると考へられるかぎり)自己といふものが見られるのである。飛躍的統一の底には自由意志がなければならぬ、それが一般者によつて限定せられると考へられるかぎり、連續的自己と考へられるものが見られるのである。

個物が動く個物として點から點へ移るには、個物は自己自身を破壞せねばならぬ。個物が破壞せられるといふことは、一つの具體的一般者が破壞せられるといふことでなければならぬ。個物と考へられるものは對象化せられた自己であるかぎり、それは自己自身を破壞するものでなければならぬ、自己自身を破壞することによつてそれが眞の個物であり得るのである。個物は破壞せらるべく有るのである。個物が破壞せられるといふことは具體的一般者が破壞せられることであるとすれば、そ

こに破壞せられた一般者といふものが考へられねばならぬ、自己自身の限定を失つた一般者といふものが考へられねばならぬ。自己自身の限定を失つた自己といふ如きものが表現的自己といふ如きものであり、自己自身の限定を失つた抽象的一般者の內容といふ如きものが單なる意味と考へられるものである。而して斯く個物が破壞せられるといふには、その根柢に否定から否定に移る自由意志がなければならぬ、根本惡がなければならない。かゝる立場からはこの世界は單なる表現的意味の世界であり、偶然の世界である。併し死することは生きることであるといふ愛の立場に於て、破壞せられた個物は動く個物として生きるのである。根本惡は唯、神の絕對愛によつてのみ救はれるのである。斯く愛によつて包まれるかぎり、自己といふものが見られるのである、我々は唯、神の愛の中にのみ自己を見るのである。個物は固、破壞せらるべくあり、點から點へ移るべくあるのであるといふ意味に於ては、自己は一般によつて限定せらるべくあるのである、罪は悔い改めらるべくあるのである。個物が一つの具體的一般者として自己自身を限定すると考へられる時、既に一般者の一般者の限定といふ意味がなければならぬ、而して一般者の一般者の限定といふことは當爲の意味を有つのである。個物が破壞せられると考へる時、自己自身

の限定を失つた一般者として表現の世界といふ如きものが見られると云つたが、個物は生るべく死するのであるといふ意味に於て、表現の世界は同時に當爲の世界の意味を有たなければならぬ、そこに思惟の世界といふ如きものが考へられるのである。而も個物が個物自身を限定して行くには、その底に無より無に移る意志がなければならない、そこに我々の無限なる欲求の世界があるのである。かゝる欲求の基體として自己自身を限定する動く個物と考へられるものが、我々の身體的自己と考へられるものであり、それは行爲的に自己自身を限定すると考へられるのである。個物が自己自身を破壞すると考へられる時、表現といふものが考へられ、それが點から點へ移るといふ意味に於て當爲といふものが考へられ、かゝる限定がその根柢に於て絶對に非合理的なるものの合理化といふべき身體的限定として行爲と考へられるのである。而して行爲的に自己自身を限定することが自己自身をイデヤ的に見るといふことである、イデヤと考へられるものは動く個物の自己限定の內容であり、人格の內容といふことができる。愛の限定として他に於て自己を見るかぎり、イデヤ的內容が見られるのである。我々が動く個物として身體的に自己自身を限定するといふことは、その根柢に於て事實が事實を限定するといふことであり、個物が

個物自身を限定することによつて一般的なるものを限定するといふ意味に於ては、それは社會的に自己自身を限定するといふことを意味する。個物が一般を限定し一般が個物を限定すると考へられる如く、社會は個人を限定し個人は社會を限定する。かゝる社會的限定の內容がイデヤと考へられるのである、社會は當爲によつて動くのでなく事實的にイデヤを限定すべく動くのである。事實が事實自身を限定するといふことと行爲的限定といふことは一見異なる樣に考へられるが、外的感官は行爲の意義を有し、行爲の底にはサンチマン・アンチームといふ如きものがなければならぬ。身體的限定に於て內的事實卽外的事實、外的事實卽內的事實である。總て直接に有るものは、かゝる意味に於て內的卽外的、外的卽內的なる身體的限定としてあるのである、卽ち動く個物としてあるのである、それが歷史的實在といふものを意味するのである。それで歷史的に有るものは、行爲的に自己自身を限定するもの、卽ち行爲するものとして有と考へられると共に、一方に個物が壞れるといふ意味に於て表現的意義を有し、自己自身を否定して他に移り行くといふ意味に於て、當爲の意味をも有つて居る。併し動く個物として他に於て自己自身を限定するかぎり、卽ち行爲するかぎり、イデヤを見るといふ意義を有つて居る。行爲的に自己自身を限

定する動く個物の底には、固、辯證法的なるものがなければならない。眞の自由意志といふのは現實を離れた無內容なる任意的意志といふのではなくして、死によつて生きるといふ意味を有つたものでなければならぬ、辯證法的に自己自身を限定するものが眞に自由なるものである。感覺を否定することによつて自由に到るのでなく、感官を通して自由に到るのである、非合理的なるものの合理化が眞の自由と考ふべきものである、イデヤといふのは感官的內容の合理化せられたものに過ぎない。而してかゝる辯證法的限定に於ては、個物と一般との關係は個人と社會との關係でなければならぬ。個人は社會に於て生れると共に、社會的となるといふことは個人が死することであり、個人が個人に生きることは社會を否定することである。之と共に社會が自己自身を限定するといふことは個性化することであり、個性化することは社會が自己自身を否定することである。感官的なるものが自己自身を合理的に限定するといふことは、社會的に自己自身を限定するといふことでなければならぬ。非合理的なるものの合理化といふことは、その根柢に於て社會的といふ意味を有つてゐなければならぬ。感官的なるものは社會的にあるのである、歷史的有である。辯證法的限定を眞の無の限定として考へる時、斯く考へざるを得ない。辯證法

的限定がヘーゲルのそれの如くノエマ的限定の意義を有し、有の限定の意義を脱せざるかぎり、それから單なる表現とか當爲とかいふ如き抽象的なるものは出て來ない、卽ち非時間的世界は考へられない。併し眞の辯證法はかゝる意味に於て成立するのでなく、否定の肯定として成立するのである、その底に他愛の否定的意義がなければならぬ。そこに社會的限定の意義があり、無數の個人が限定せられるのである。我々の人格と考へられるものは、否定の肯定として考へられるのである。愛の絶對否定の立場に於ては、破壞せられた一般者の世界卽ち非時間的世界といふ如きものが現れる。併しその底に無から無に移り行く意志といふものが認められるかぎり、動く個物として個人的自己といふ如きものが成立するのである。斯く愛の自己限定として有るものが動く個物といふ如きものであるといふことは、それが行爲的に自己自身を限定するといふ意味を有すると共に、個物が個物自身を破壞するといふ意味に於て表現の意義を有し、次に移るといふ意味に於て當爲の意義を有つて居る。辯證法的に自己自身を限定する歷史的有は、行爲的なると共に表現と當爲との意義を有つてゐなければならぬ。而してその根柢に於て無から無に移ると考へられるかぎり、事實が事實自身を限定すると考へられるのである。事實が事實自身を限定

するといふのも、單に非合理的と考ふべきでなく、既にかゝる意義を有つてゐなければならない、當爲も一種の事實である。